

待兼山俳句会

第六百八十二回

世話人

山田安廣・鈴木輝子・寺岡 翠・根来眞知子
東中 乱・向井邦夫・森 茉衣

令和五年十二月十八日（月）

会場 大阪倶楽部 会議室 締切 午後二時

出席者 瀬戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡 翠・東中 乱

東野太美子・向井邦夫・森 茉衣・山田安廣

投句者 植田真理・碓井遊子・草壁 昂・鶴岡言成・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄・根来眞知子

平井瑛三 出席者十二名＋投句者九名 計二十一名

兼題 冬の川・外套（幹三） 冬籠・障子（暁子） 卓上に 山茶花 当季雑詠 通じて八句

次回 例会 令和六年一月十五日（第三月曜日） 会場 大阪倶楽部 会議室 締切 午後二時

兼題 松納・寒椿（幹三） 大寒・春著（暁子） その他当季雑詠

なお、当日は十二時より大阪倶楽部二階レストランで新年会を開きます（お知らせ欄参照）。

選者吟

障子よりむかしの明り入り来る

幹三

人の出す音遠ざけて冬籠

外套のずうつと奥にある身体

別れると決めて外套羽織りけり

暁子

祖母今も障子開ければあるやうな
いつもなら見えぬもの見せ冬の川

幹三 選

祖母今も障子開ければあるやうな

着膨れて座席狭まる車中かな

外套の襟立て屋台コップ酒

鯉ゆらと残る深みや冬の川

◎冬の川渡れば風の強き町

ただ広し石ばかりなる冬河原

姥捨の野にきらきらと冬の川

笑顔満つ家族総出の障子貼り

鱈ちりや北の怒涛を偲びけり

◎水平線へこませ冬の下落暉

稿成りしこともありけり冬籠

細々と中州を縫ふて冬の川

一片も欠けぬ山茶花句座納む

陰々と遠吠え聞きて冬籠り

この日のみ童のごとく障子剥ぐ

◎厚く重く父の外套のしかり

◎別れると決めて外套羽織りけり

ダウンコート猫背の吾にそと添ひぬ

外壁を薪で囲ひて冬籠

田舎家の障子開ければ村広し

暁子

堯子

瑛三

兵十郎

輝子

安廣

和江

朱美

遊子

太美子

乱

乱

兵十郎

昂

真理

乱

暁子

翠

兵十郎

安廣

門の戸をひらりとかはす冬の蝶

◎庭の木の影上りゆく障子かな

冬の川師の厳しさを時にふと

貼り替えし障子明かりの眩しくて

冬の川水面の空も細くなり

耳遠く世間も遠く冬籠

外套の野球選手のでかきこと

◎白障子母の部屋より仕上がりし

◎人出でて薪割る村や冬籠

ごほうびのぜんざい囲む白障子

茉衣

堯子

眞知子

言成

安廣

暁子

邦夫

恵子

兵十郎

恵子

幹三 特選句講評

・冬の川渡れば風の強き町

輝子

小説の冒頭のようです。橋を渡った町に何が待っているのでしょうか。人との出会いなのか、何か縁のある土地なのか。ドラマのある一句です。

・水平線へこませ冬の下落暉

太美子

冬の太陽の存在感が描かれました。蜃気楼の作用で実際に水平線がへこんで見えることがあるそうですが、夏の太陽と違うぎらぎらとした明るさや重さを感じます。

・厚く重く父の外套のしかかり

乱

父の残した(古い)重い外套という句は時々見ますが、この句は「のしかかる」が秀逸。これで一気に父からの圧力・影響と共に生きる息子が浮かび上がりました。語尾は「のしかかる」とした方が切れがよいと思います。

・別れると決めて外套羽織りけり

暁子

この句もドラマがあります。物語を考えさせるということは「読者のための余白」があるということです。俳句は省略。怖れずに説明を捨て、報告をしないことを心掛けたと思います。一句です。

・庭の木の影上りゆく障子かな

堯子

影の動きでいい時間が描かれました。冬日和、障子を通した柔らかい光、そして鳥の鳴き声も聞こえてきそうです。

・白障子母の部屋より仕上がりし

恵子

家じゅうの障子の貼り替えでしようか。最初に貼りあがったお母さんの部屋がぱあっと明るくなりました。家族和気あいあい、冬のいい一日です。

・人出でて薪割る村や冬籠

兵十郎

ひっそりとした冬の村が浮かびます。家にこもっていた人が出てきて薪を割る、これも冬籠の一部なんですね。乾いた音が余計に静けさを感じさせます。

暁子 選

◎ただ広し石ばかりなる冬河原

安廣

掛茶花障子明りの中に浮き

兵十郎

街路樹をしばし聖樹としたる街

幹三

冬川や目の美しき未開人

昂

自由求め厳冬渡河の民ありと

翠

◎水平線へこませ冬の大落暉

太美子

稿成りしこともありけり冬籠

乱

外套の肩やバブル期ふつふつと

和江

冬籠りコロナ籠りも兼ねながら

朱美

◎食卓は書斎でもあり冬籠

輝子

父逝きて重き外套残りけり

幹三

外套を脱ぎて代打の草野球

安廣

ほんたうの冬籠とは死すことや

太美子

救急医らストーブ囲み患者待つ

遊子

臨終は真白障子に光待たむ

遊子

ダウンコート猫背の吾にそと添ひぬ
外套に探しあぐねしチケットが

翠

◎戸の内や自由と孤独冬籠

堯子

外套の野球選手のでかきこと

邦夫

仏軍の退路断ちたる冬の川

堯子

冬籠解きて参加の寮歌祭

瑛三

◎去来する雲や鳥語や障子越

太美子

穴ふさぐ切り紙の花白障子

輝子

正座する祖母の影ある障子かな

幹三

冬の川師の厳しさを時にふと

眞知子

暁子 特選句講評

・ただ広し石ばかりなる冬河原

安廣

水量が減って、他の季節なら水底にある石も乾いて
白々としている。水辺の植物の枯れた冬の河原の蕭条と
した物淋しい風景を描かれた。

・水平線へこませ冬の大落暉

太美子

どこの海岸だろう。大落暉が水平線をへこませている
と見られたのがユニーク。冬の朝は気温より海水の温度
が高いので、霧状の物が発生するが、夕方はそれもなく、

冬の夕日は特に美しい。「冬の」を「寒の」とされると一
層張り詰めた感じが出るか？

・食卓は書斎でもあり冬籠

輝子

冬籠でなくても、コロナ禍の頃から在宅ワークの方た
ちにはこういう状態が増えているのではないだろうか。
食卓即ち文机となっている家庭、それはまた動くのが不
自由な老人たちの家でも見られることだ。食事時になる
と本や書類を片端に押しやってスペースをあける。一部
屋で過ごす、これもまた楽しからずや。

・戸の内や自由と孤独冬籠

堯子

句会の批評の場で乱さんが言われたように、二つの抽
象的な単語で冬籠の本質を表現された。「自由」や「孤独」
というような抽象概念を表す言葉を俳句で使うのは難し
いが、上手に嫌味なく用いられた。

・去来する雲や鳥語や障子越

太美子

障子を閉めているので外の景色は見えない。しかし差
し込む光の加減によって雲の去来が想像出来る。鳥の姿
も見えないが、飛び交う影が障子を通り、鳴き声が聞こ
える。室内の静寂がうかがえる。

互選三句

朱美 選

小鳥来て障子に揺れる枝の影

堯子

外套を脱ぎて代打の草野球

安廣

ご褒美のぜんざい囲む白障子

恵子

一家総出で障子を張って美味しいぜんざい我が家でも。

瑛三 選

冬の川渡れば風の強き町

輝子

外套に探しあぐねしチケツトが

輝子

穴ふさぐ切り紙の花白障子

輝子

昔は妻の役目。貼っても貼っても破られる障子。

和江 選

うしろ手に閉めし障子やすきま風

瑛三

姑も母も縁のなかりし冬ごもり

眞知子

冬川と冬川のぶつかるところ

幹三

賽の河原のように、寒々しく茫茫とした光景を。

かな子 選

水平線へこませ冬の大落暉

太美子

冬籠なにをするにも眠気あり

真理

別れると決めて外套羽織りけり

暁子

「外套」とはセピア色の風情。老いらくの恋か。

邦夫 選

やるせなさ攫って欲しき冬の川

眞知子

冬籠店の出口はひとつだけ

輝子

この日のみ童のごとく障子剥ぐ

真理

剥ぐのは実際簡単ではないが破る楽しみも味わえる。

恵子 選

冬籠りさせぬと雑事追ひかけ来

太美子

穴ふさぐ切紙の花白障子

輝子

戸の内や自由と孤独冬籠

堯子

難しい事をさらりと言われる感性が素晴らしいです。

言成 選

障子よりむかしの明り入り来る

幹三

張替へし障子の白を透く日差し

眞知子

小鳥来て障子に揺れる枝の影

堯子

和室でよく目にする場面を巧く句にされた。

堯子 選

街路樹をしばし聖樹としたる街

幹三

自由求め厳冬渡河の民ありと

翠

光跳ね飛び散る都心冬の川

和江

年末の煌びやかな電飾を映す暗い川の景。美しいです。

東野太美子

障子よりむかしの明り入り来る 幹三

外套のずうつと奥にある身体 幹三

白障子母の部屋より仕上がりし 恵子

「白」と「より」が効果的。優しくて清々しい御句。

輝子 選

人の出す音遠ざけて冬籠 幹三

外套のずうつと奥にある身体 幹三

厚く重く父の外套のしかかり 乱

外套は父のおさがり。父の権威ものしかかつてくる。

兵十郎 選

外套を脱ぎ捨て変化嫁母に 恵子

障子閉めなぜか明るい母の部屋 朱美

外套のずうつと奥にある身体 幹三

外套をこのように捉えたことはなかった。驚きである。

昴 選

正座する祖母の影ある障子かな 幹三

別れると決めて外套羽織りけり 暁子

耳遠く世間も遠く冬籠 暁子

老いることは正に冬籠状態になること。

茉衣 選

自由求め厳冬渡河の民ありと 翠

張替へし障子の白を透く日差し 眞知子

渾身に未来を抱き冬木の芽 太美子

暗く不快な報道の多い中未来への希望が掻き立てられる。

眞知子 選

田舎家の障子開ければ村広し 安廣

耳遠く世間も遠く冬籠 暁子

掛茶花障子明りの中に浮き 兵十郎

お茶室の仄かな明りの中に浮く花は何？

真理 選

障子よりむかしの明り入り来る 幹三

外套のずうつと奥にある身体 幹三

水平線へこませ冬の大落暉 太美子

「へこませる」という反射の表現が素晴らしいです。

翠 選

ストリートダンスの羽織る古オーバー 兵十郎

別れると決めて外套羽織りけり 暁子

人出でて薪割る村や冬籠 兵十郎

冬籠と言う静を薪割りと言う動で表しているのが良い。

盛雄 選

着膨れて座席狭まる車中かな 堯子

街路樹をしばし聖樹としたる街 幹三

庭の木の影上りゆく障子かな 堯子

庭木の影が障子に映って暖かい太陽の動きが感じられる。

安廣 選

冬の川師の厳しさを時にふと 眞知子

庭の木の影上りゆく障子かな 堯子

稿成りしこともありけり冬籠 乱

部屋に籠って懸命に原稿を書いた日が思い出される。

遊子 選

外套を脱ぎて代打の草野球 安廣

冬の川師の厳しさを時にふと 眞知子

水平線へこませ冬の日落暉 太美子

冬の海辺の落日の輝き、水平線のくぼみの如くに。

乱 選

いつもなら見えぬもの見せ冬の川 暁子

草みなが茶色にそよぐ冬の川 茉衣

戸の内や自由と孤独冬籠 堯子

冬籠の本質を自由と孤独の二語で適格に表現した。

訂正（六八一回句会報「改訂版」5頁上段 和江選）

誤 小春日や分かれてもまた出会う道 幹三

正 小春日や分れてもまた出会う道 幹三

参加者自選句

やさしさを忘れたような冬の川

冬の川岸辺に眠る艇庫かな

再再の「ローマの休日」冬籠り

日当たれる小波ゆかし冬の川

ごほうびのぜんざい囲む白障子

冬籠り散歩の距離も短くし

戸の内や自由と孤独冬籠

渾身に未来を抱き冬木の芽

叱りつつ障子をつぎし日の遠く

掛茶花障子明りの中に浮き

陰々と遠吠え聞きて冬籠り

門の戸をひらりとかはす冬の蝶

張替し障子の白を透く日差し

冬籠なにをするにも眠気あり

ダウンコート猫背の吾にそと添ひぬ

穴あけて障子にはしやぐ赤子かな

外套を脱ぎて代打の草野球

鱈ちりや北の怒涛を偲びけり

三世代障子屏風の大広間

朱美

瑛三

和江

邦夫

恵子

言成

堯子

太美子

輝子

兵十郎

昂

茉衣

眞知子

真理

翠

盛雄

安廣

遊子

乱

即吟

「卓上の山茶花」

鈴木輝子

十二月の例会では卓上にやや小ぶりの赤い山茶花がかざられた。句会が終わってから、ほっとする間もなく作句にとりかかった。ほんの五分くらいの時間であったが、卓上の山茶花、あるいは発想をとばして、庭の山茶花、町の山茶花、いろんな山茶花が詠めた。

山茶花のくれない蕊の黄を囲む

暁子

道に沿ひ山茶花散るやばらばらと

邦夫

山茶花の句会で言わるあと五分

恵子

山茶花の色なき庭に散り敷きて

堯子

山茶花の全き赤を愛でて句座

太美子

山茶花の咲いて今年の句座果てぬ

輝子

さざんかの紅引き立たす花器の白

兵十郎

紅の山茶花映ゆる白花瓶

茉衣

垣根より山茶花一花剪り来る

幹三

佳人の如紅き山茶花見つむ句座

翠

山茶花を長めに切りて母の墓

安廣

垣根沿ひ山茶花を掃く日々来たり

乱

会費… 三〇〇〇円（会から援助あり）

連絡先… 東中乱さん

ひとこと

山田安廣

今回も選者の皆さんから色々な助言を頂きながら、楽しい時を過ごす事が出来ました。全部を書けると良いのですが紙面の関係で一例だけを…。

○厚く重く父の外套のしかかり ↓ 「のしかかり」とすると川柳ぽくなるので「のしかかる」とした方がキレが良くなる。

○冬の川水面の空も細くなり ↓ 「空も」とするとイメージが鈍くなる。「空の」にする方が良い。

このように、一文字とてゆるがせにしないように注意して欲しい、との事でした。

本年は会報の編集外注に当たって皆様方それぞれにご協力を頂きました事を始め、お力添え本当に有難うございました。来年も引き続きよろしくお願い申し上げます。

新年会へのお誘い

日時… 令和六年一月十五日十二時より

場所… 大阪倶楽部二階レストラン